一一ノ一五、笠置山十境之詩

出典 笠置寺所有の原本

詩として笠置寺に伝わっているが、本題は「笠置山十題」となっている。 笠置山記を記した黄檗宗の僧、 月譚が笠置山を懐古して詠んだもの。 笠置山十境の

教えを受けた。寛文十三年(一六七三年)には、 直指庵の二代目住持となった。 月潭道澄(一六三六年~一七一三年)、江戸前期の黄檗宗の僧。 黄檗山萬福寺にて独照の法を嗣ぎ、 嵯峨直指庵の独照性円に 後に

たのであろう。 と書かれ、署名は「直指七十三翁、 山独照和尚之筆、小文字者同月潭和尚之作」と金字で記す。この 笠置寺に保存されている収納箱の表は「笠置山十境之詩」と記され、 独照書」と署名されている。 「大文字」は「龍華聖境」 師が弟子の詩に花をそえ 裏に「大文字者峩

原文

笠置山十題

笠置名山

誰将一笠置巖頭 誰か将に一笠を巌頭に置きて (天智天皇の皇子が遭難の地に笠を

置いた古事)

宝地創開歳月悠 宝地 (笠置山のこと)を創開し、 歳月悠なり

水繞山圍兜率境
水繞り山圍む兜率の境

何殊剡縣石城丘 何ぞ剡縣石城の丘を殊んや(注一)

泉河流水

千尺断崖遮鳥道 千尺の断崖鳥道 (険しい山道) を遮り

一渓流水濯塵心 一渓の流水、 塵心(俗っぽい考え)を濯う

古今治乱興亡事 古今の治乱、興亡の事

付與灘頭雪々音 灘頭(早瀬のほとり)霅々の音を付與す

弥勒石像

宝石曽経劫焼災 宝石(弥勒石)曽って劫焼の災を経て

聖容不見只崔嵬 了知真相原無相 真相 聖容見えず只崔嵬 (まことの姿)、 原無相 (石や岩のごろごろする険しい山) あるのみ (形のないこと) なるを了知せば

許汝親瞻慈氏來 汝を許す。 親しく慈氏 (弥勒) の来るを瞻るを

般若台院

六百琅函放宝光 六百の琅函(清らかなはこ、六百卷の大般若経をいう)宝光を放ち

甚深般若鎮霊場 甚深 (極めて奥深いさま)たる般若、 霊場を鎮む

神龍何処請移去 神龍何処にか請いて移去す

空見山台野草芳 空しく見る山台に野草の芳しき

醍皇旧跡

帝輦曽停此石房 帝輦(天子の乗る車)曽って此石房に停り

愁聞四海逆波揚 奚ぞ料らん (推量できようか) 仏聖精修の地愁い聞くは四海 (天下) に逆波の揚るを

奚料仏聖精修地 \mathcal{O}

一旦変為戦闘場 一旦(ある日にわかに)変じて戦闘の場と為らんとは

解脱遺蹤

形闕の廉前に曽って講を闡き (注三) とうけっ

白雲堆裏水韜光 彤闕廉前曽闡講 白雲の堆裏(堆積したなか)、 光を韜む

誠知高徳伝千古 誠に知る高徳は千古(永遠)に伝わり

草木猶薫ず解脱の香

草木猶薫解脱香

千手洞窟

千手窟中世界寛

千手窟中の世界寛く

重々刹海現毫瑞 重々たる刹海(陸と海、 世界)、 毫瑞 (極めて繊細なるもの) に現わる

神僧棲止知何氏 神僧棲止す、 何氏や知る

惹得天花落満壇 天花(天界に咲くという霊妙なる花)を惹得し落ちて壇に満つ

正月堂基

忠師昔日祝堯仁 忠師 (実忠のこと) 昔日、堯の仁 (堯は中国古代の聖天子) を祝し

伝得率陀勝軌真 率陀 (ほとけ)の勝軌(すぐれた法、 十一面悔過) の眞を伝え得たり

堂廃無人修此法 堂廃れ人の此法を修する無くも

巖梅獨綻歳朝春 巌梅獨り綻ぶ歳朝(元旦のこと)の春

孤村隔水

春深花木覆村蹊 春深くして花木村蹊を覆い

隔水遥看図画済 水隔てて遥に図画 (絵のこと)を済すを看る

日暮東征投宿客 日暮れて東に征きて投宿の客(この頃、 宿は木津川を渡った北岸から少

し東にあった)

頻呼沙艇度前渓 頻に沙艇(小舟)を呼びて前渓(木津川) を度る

恠石畳空

横者如船峙似峯 横るは船の如く (薬師石)、 時てるは峯に似て (弥勒石など)

奇嚴恠石畳重々 奇巌恠石畳て重々

巨霊分破鴈山境 巨霊は鴈山 (注四) の境を分破し

移置此間秀気鍾 此の間に移し置きて秀気(山水の景色のすぐれたさま)鍾つ

峩山月譚澄書

注一 中国浙江省に所在した石城寺には石壁に弥勒像が彫られ、 唐代の代表的詩人である孟浩然が次

の詩を作ってその雰囲気を愛でている。

石壁開金像, 香山倚鐵圍。

下生彌勒見, 回向一心歸。

竹柏禪庭古, 樓臺世界稀。

夕嵐增氣色, 餘照發光輝。

講席邀談柄,

泉堂施浴衣。

願承功德水, 從此濯塵機。

注二 形 は赤, 闕」 は天子の宮殿の門をいう

注三 Ş 解脱上人伝にいう。 暮年に懺悔して仏宇をいとなみ鹿福をすゝむ。 すへらき(後鳥羽上皇)楊柞の御あそひをことゝし給ひよく鹿を射したま 此ひしり(解脱上人)の徳望をきこしめさ

れ つゐに御落慶の導師となし・・・。

注 四 中国山西省の鴈山。 険しい山容で、 中国北辺守備の要地。 ここに雁門の関所あり)



